

氏名	文 禎 顯
学位の専攻分野の名称	博士(神学)
学位記番号	甲神第9号(文部科学省への報告番号甲第404号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年2月29日
学位論文題目	『告白録』における ad te の存在形成運動の構造 ：神探究と人間存在の可変的構造
論文審査委員	(主査) 教授 土井健司 (副査) 教授 David Wider 片柳 榮 一 (聖学院大学大学院教授、京都大学名誉教授)

## 論文内容の要旨

申請論文は、古代キリスト教思想家アウグスティヌスの『告白録』を研究対象とし、その全体を統べるモチーフが被造物における ad te (汝に向かいて) という神への志向性にあるとの着想のもと、テキストをとおしてこれを実証しようとした研究である。

アウグスティヌスの『告白録』は古来多くの読者を惹きつける古典の一つであるが、十三巻から成る全巻の全体像、あるいは全体の統一性は曖昧なものとなっている。つまり第一巻から第九巻までは彼の半生を扱う自伝的論述から構成されているが、第十巻では現在の自分を問題とし、さらに第十一巻からは天地の創造の神秘に迫る思索を展開するのである。少なくとも第十巻まではアウグスティヌス自身の事が問題となると言えるが、第十一巻以降の創造論がそれまでの十巻とどのように関連するのかが分からない。かつてある研究者が第十一巻以降を切り離して考えるべきだという極端な説を唱えたこともあったが、アウグスティヌス自身が『再考録』で十三巻と述べることもあって、やはり全体は十三巻から成り立っているとすべきであろう。では『告白録』はどのような全体構想のもとに執筆されたのか。どのようなつながりがあるのか。この統一性の問題は、多くの学者が研究課題として取り組んできたのである。

申請論文をとおして文氏はこの課題に正面から立ち向かい、ad te という語句によって表現される事態の展開として全体を捉える可能性を追求している。

序論では『告白録』の統一性という問題をめぐって研究史を概観しそれぞれの学説を検討し(第一節)、また各章の主題についてもこの序論において先行研究を検討して(第二節)、今日の問題とすべきことを浮き彫りにし、本論につなぐ。

本論第一章では、『告白録』冒頭の賛美の箇所を取り上げ、そこに見られる laudare (賛美する) の分析を行う。神を賛美することは、ad te という人間の被造的な根本態勢の完成に向かうことであって、単なる賛美の行為ではない。さらに創造論とキリスト論と関連しつつ laudare が人間の存在形成として捉えられていることを明らかにしている。つづく第二章は ad te (汝に向かいて) と abs te (汝から離れて) という真逆の運動様態を意味する語句を『告白録』より拾い出して丁寧に分析し、人間存在のアプリオリとしての「不安心」(cor inquietum) の意味を探り、神への存在形成運動を促すその根源的意味を明らかにする。

第三章は『告白録』第十巻における記憶論と欲望の問題を取り上げ、記憶の中での神認識ならびに自己浄化の欲望の二つの探究について考察する。こうして人間存在の可変的構造における三つのポイントが明らか

にされている。すなわち、罪ある内面から記憶の内側へと開かれた可変性、そして悪しき意志から善き意志へ、あるいはその逆への可変性、最後は、慎みという欲望の抑制から認識への可変性である。第十巻においてこうした人間存在の可変性が問題となっていることを明らかにした。

さらに第四章は、第十一巻における時間論のテキストを取り上げて、*distentio*, *intentio*, *extentus* の三つの概念を考察する。とりわけ精神の広がりとしての *distentio* は精神の「分散」とも捉えられ、否定的な意味合いも有する。これらの概念を検討することで、まず神へと開かれている面と深淵に閉じられる面の双方が *distentio* に認められること、そして存在の分裂を克服するため *intentio*、ならびに *extentus* が試みられることがオステアでの経験をとおして論じられる。こうしてアウグスティヌスの時間論についても人間存在の可変性と関連付けて論じている。

第五章は第十二巻、十三巻における「天の天」、つまり霊的被造物の創造論を考究するが、その存在形成において「向き直り」(*conversio*) の形而上学的意味が明らかにされ、霊的被造物の根本態勢としての *ad te* という可変的構造が明らかにされる。

以上をとおして第一巻冒頭の賛美のテキスト、また *ad te* ならびに *abs te* の用例分析をとおして第九巻までを含む全体、そして記憶論と欲望論を含む第十巻、時間論を含む第十一巻、霊的被造物の創造論を扱う第十二巻、十三巻のそれぞれが検討され、『告白録』の全体が内的に、人間存在の可変的構造をもとにした神探究の遂行というモチーフで貫かれていることを明らかにしたといえる。

## 論文審査結果の要旨

以上の内容をもつ文氏の学位請求論文について、わたしも審査委員会はそれぞれが精読した上で、2月20日に一時間半にわたって公開の口頭試問に臨み、申請者との討論を行った。その結果、申請論文が主題について一定の成果を得ていることを確認し、そしてその成果にオリジナリティーが認められるものと判断した。ただし批判すべき点がないわけではない。以下は今後の課題として確認されたことである。

まず研究史の扱い方であるが、先行研究を網羅的に列挙するにとどまり、これと十分対話をしているとは評価できないところが見られること、また先行研究として取り上げるべきものの取捨選択が十分にはなされていない。また副題において並立されている神探究と人間存在の可変的構造の関係について叙述に混乱が認められる。たとえば副題では「と」で結び付けているが、両者は並立するものではなく、むしろ人間の可変的構造を軸にして神探究が遂行されるのであって、両者は同一事の二つの側面というのではない。さらに第一章については *laudare* とは何かを規定する必要があったであろう。さらに第二章において *cor inquietum* を「不安な心」と訳すが、これは心理学的な概念ではなく、存在論的なものであって、その点を意識した叙述を展開すべきであろう。

以上考慮すべき点は残っていて、これらは今後の研究に期待するところである。また留学生であるためやむを得ないこととはいえ、日本語表現がぎこちなく、いささか読みにくい箇所も散見された。しかし、これまで見過ごされてきた *ad te* という語句のなかに『告白録』の根底に流れるモチーフを認め、それをいくつもの研究によって実証して、全体をまとめ上げた業績は特筆に価するものであって、申請論文が研究課題についてオリジナルな一定の成果を得、博士学位にふさわしいものであると評価される。